

なっちゃんのおまじない

配役一覧

① 高橋

役割：取材者／語り手／観測者

性別：不問

年齢：20代

声質想定：落ち着いた中音域、感情を抑えた芝居ができる声

キャラ設定

WEBライター。

都市伝説やネット発の噂を理屈的に検証するタイプで、オカルト信奉者ではない。

今回の取材も、「噂の出どころを特定する」という仕事意識から動いている。

しかし、子どもたちの証言の一致、そして作者・ハ雲の言葉によって、少しづつ自身の常識が揺らいでいく。

② ハ雲

役割：作家／語り部／狂気の中心

性別：不問

年齢：30代～50代

声質想定：柔らかく低め、抑揚をつけすぎない声

キャラ設定

大人気児童文学『なっちゃんのおまじない』シリーズの作者。物腰は穏やかで、成功した作家として余裕がある。

「子どもに寄り添う大人」を装っているが、言葉の端々に価値観の歪みが垣間見える。

作中で語られる真実は
事実か、虚構か、戯言か。
最後まで判別できない存在。

演技ポイント

基本は終始“穏やか”

声を荒げない

怖さは論理・間・語尾で出す

低温の狂気役

あらすじ

児童文学シリーズ『なっちゃんのおまじない』には、作中に登場する「おまじない」を実際に試すと、子どもが神隠しに遭うという都市伝説があった。

失踪したはずの子どもは、家族や友人の記憶から完全に消え、存在した痕跡すら残らないという。

噂の出どころを追うWEBライター・高橋は、全国各地の子どもたちから、「友だちが目の前で消えた」という驚くほど一致した証言を得る。

調査の末、高橋はシリーズの作者・八雲を取材する。穏やかで知的な作家との対話は、やがて“おまじない”的正体と、世界を越える恐るべき真実へと踏み込んでいく。

それは作り話なのか、それとも本当に存在する神隠しか。

取材の最後、すべては冗談だと笑う八雲。しかし別れ際に残された一言が、高橋と読者に消えない違和感を刻みつける——。

「呪文が効かない者は、厄介ですね」

ボイスサンプル

高橋

①失礼します。
はじめまして。WEBライターの高橋一です。
本日はお時間をいただきありがとうございます。

②…どうして先生は「失踪した子どもが存在したのか」と質問されたのでしょうか？

③どんな理由があろうと私は貴方を許すことはできません。何としてでも罪に問わせます

八雲

①はじめまして。八雲(やくも)です。
どうぞお掛けください。

②…ふははは。もしかして本気にしましたか？
全部冗談ですよ。

③やれやれ。呪文が効かない者は厄介ですね。放っておいても問題はなさそうですが、危険の芽は早めに摘んでおきましょうか。さようなら、高橋さん。